

(4) 爺ヶ岳の怪光～ある回想

(1995年5月、爺ヶ岳東尾根)

鹿島山荘の裏の急な尾根に取り付いた頃から空模様が段々怪しくなってきた。腐った残雪はズボズボ潜るし、残雪の上に顔を出した根曲がり笹で滑って足が進まない。一步前進二歩滑落の態である。一面のガスと小雨で一向に景色も見えず、五十路を越えたロートル3人組には些かきついアルバイトだ。

山を再開して5年、学生時代の岳友を誘って爺ヶ岳の東尾根から鹿島槍を目指したのは丁度10年前のゴールデンウィークのことであった。この年は春の訪れが早かったのか、信濃大町から鹿島部落に至る山麓の山々は満開の辛夷の花が咲き乱れ、その山肌が真っ白に染まって霞んでいる様は春の山里の風情満点であった。タクシーの運転手さんの話では、辛夷が勢よく咲く年は豊作であると言いつけられているという。

さて、潜る残雪に滑る笹、足を取られるハイマツとの格闘にいい加減ウンザリした頃、疲労困憊の態でやっとジャンクションピーク(1767m)に着いた。今日の幕場に予定していたP3(1978m)はまだまだ遥か上方に聳えていて、このピークを見上げた途端に全員戦意喪失、めいめいザックを放り出して座り込んだ。これしきの登りでくたばるなどということは、曾っては無かったという自負と、このところ急に始まった肉体の衰えの狭間で、内心忸怩たるものがあつたのであろう、3人とも互いにあらぬ方向を向いて口数が少ない。

トロンとした目付きで見るともなく冷尾根の方を眺めているうちに、ガスが少し薄れ、爺ヶ岳の中央峰や北峰がぼんやりと浮かんできた。心なしか薄日も射してきたようだった。マア、明日頑張って今日の遅れを取り戻せばいいサ、と気を取り直してテントを張る。外が温かいので、雪のテーブルと椅子を作ってモツを焼き、ウンウン言いながら担ぎ上げた御神酒を頂戴しているうちに、先刻の心の動揺はどこへやら、ピンク色から紫にやがて薄墨色に移りゆく雪山の暮色を堪能しながらの宴となつたのであつた。

夜半に目覚めて、用を足しに出てみると、何かボーとしたような鈍い光の環みたいなものが小冷沢の辺りに漂っているように感じられた。こんな時間に登山者か？雪崩の巣である沢を登って来るはずは無いし、こんな真夜中に行動するはずも無い。酒に酔った寝ぼけ眼をこすって目を凝らす。赤い環の外にもう一重蒼い光の輪があるようだった。放射状に光っているようでもあり、ゆっくりではあるが、こちらに向かって昇ってきているようにも見えた。暫く見ているうちに、そのモノは段々と小冷沢を昇って来て輪郭や色もはっきりとしてきた。やがて冷尾根の真ん中辺りまで昇ってきて、丁度目の高さになった。ブロッケン山の怪よりもシャープで、ちょうど山の端から顔を出したばかりの朝日を写真に撮った時のようにダイヤモンド形に放射光が光っている。

色はやはり中の輪が赤で外が青色であつた。大きさはビルの屋上に設置された大きなパラボラアンテナくらいに見えた。一瞬、周りが急に明るくなって、闇に沈んでいた尾根や沢の輪郭もはっきりと浮かび上がった。やがて冷尾根に沿って上昇し、爺ヶ岳北峰頂上付近の天空に薄れて消えた。この間、どのくらいの時間だったのだろうか。長い時間だったような気もするし、数秒間だったような気もした。

急に背中に冷水を浴びせられたような寒けを覚えてテントに逃げ込んだ。一体、さっき見たモノは何だったのか……。気象条件の



いたずらで起こった発光現象の一種か。この夜は重い湿気が垂れ込めていたので、空中放電でも起こったのであろうか。いやいや、雷鳴などは全く聞かなかった。深い山奥の鉱脈が、雨の夜などに微かな光を大気中に放出することがあると聞いたことがある。真偽のほどは定かでないが、昔の山師はこの現象を利用して鉱脈を発見したとも言われている。しかし、仮にこのような現象であるとしても、火の玉が移動する筈はなかろう。狐の嫁入りにしては一匹だけというのも腑に落ちない。

では、やはり・・・？

そう言えば、さっき見た火の玉には温度感や現実感が全く感じられなかった。何か冷たい色の火の玉であった。そう気づくと一層背筋が寒くなってきた。この辺りの雪渓に、この冬の遭難者が埋もっているのかも知れない。そろそろ雪渓も解け始めたので、あるいは・・・？

隣で寝ていた相棒も、急にテントの外が昼間のように明るくなって目が覚めたと言っていたから、私だけの幻影ではあるまい。あれこれ考えているうちに疲れて、いつの間にか眠りに落ちていった。

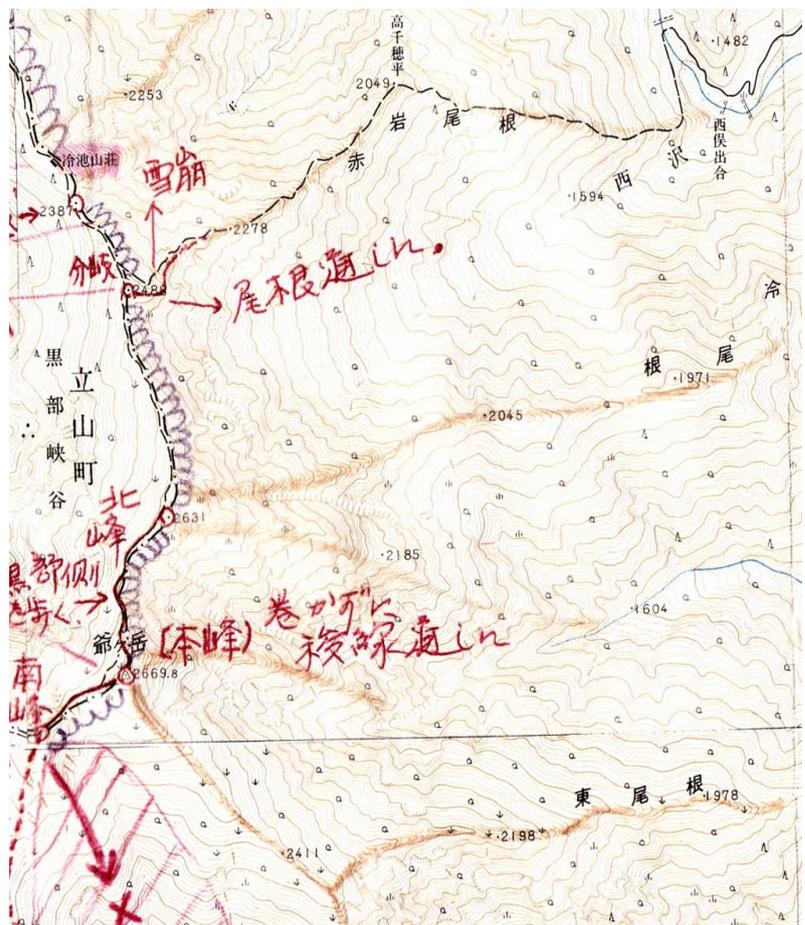
翌朝、背中が落ち込んでいくような気配で目が覚めた。何と天幕が 50cm 以上も沈み込んで、ハイマツの枝の上に引っ掛かっているではないか。昨夜来の高温でテントの下の雪が融けてハイマツが現れていたのであった。うっかりすると天幕ごと溪に滑り落ちていたかも知れなかった。運悪く雨も強くなってきて、テントも水浸し状態。昨夜の火の玉の件もあるし、これはもう撤退した方が良さそうだ。雨に濡れて重くなった装備を担いで昨日のトレースをトボトボと下る。昨日は雪の下に隠れていたハイマツが今日はナイフリッジの雪の上に顔を出していて足を取られ、何とも歩きにくい。

アッ、相棒の一人が滑った！ どんどんスピードがついて、小冷沢の雪渓を滑っていく。ピッケルで滑落停止を試みているようだが、効果は無いらしい。そのうち身体も回転し始めたようだ。おっ、天の助けか！ 大きな岳樺の根元の穴ボコに激突してやっと停まった。随分長い時間だったような気がした。100mくらいは滑ったであろうか。急いで降りてみると、幸い怪我はないようだったが、呆然自失の態で座り込んでいた。ピッケルも何処かに飛ばされたのか見当たらない。重いザックを担いで登り返す気力も失せているらしく、覚束ない仕種で会社から支給された携帯電話だけを取り出し、ザックはそのまま穴ボコに放置してやっと尾根まで這い上がった。

聞いてみると、ハイマツ帯が歩きにくいのでちょっと横着して尻セードしたら、そのまま最大傾斜線に沿って滑り落ちてしまったとのこと。万有引力の法則に従い物体が鉛直方向に落ちるのは物の道理である。悪いことにツルツルのレインウェアが墜落を加速したようだ。

東尾根末端の樹林帯は傾斜がかなりきつい。最近とみに腹周りの恰幅がよくなった（余分な脂肪で）もう一人の相棒は、前を向いて降りられず、後ろ向きになって下っている。

「オイ、熊じゃないんだから、前を向いて歩いたらどうだ」と冷やかした途端に、今度はこちらが笹を踏んで滑ってしまった。大きな樹の枝に胸からぶつかって停まったものの、胸部に激痛が走り暫くは息もできな



かった。先に滑落した相棒が降りて来てザックを外してくれた。帰宅してから医者に行ったら鎖骨が折れていた。

ほうほうの態で信濃大町まで逃げ帰り駅前の旅館に投宿したが、晩酌の意気は上がらなかった。翌朝、ザックもピッケルも失った、登山靴を履いただけの無様な恰好の相棒は、任地の富山に独りで帰って行った。丸腰でホームに佇んでいた彼の姿にはどこか哀愁が漂っていて、帰宅して玄関に入った途端に、奥方にきつくお灸を据えられている姿が目には浮かぶのだった。

火の玉のことは、旅館の人にも警察にも話さなかった。「疲れていて、何か幻影でも見たのでは？」と軽くいなされるのが落ちだと思ったからである。我々自身が火の玉にならなくて良かったと思う反面、せっかく火の玉氏が自分の居場所を知らせて、早く発見してくれと言っているのかも知れないのに、何の手も打たなかったという悔恨が、その後いつまでも心の片隅に引っ掛かって離れなかった。

10年前のホロ苦い憶い出である。

(2005年 記)

(白山書房刊『山の本』第52号(2005年夏号) 所載)

(本稿 完)

[「怖かった山々」目次に戻る](#)